

## 中国西北出稼ぎ農村における住民と農村のつながり —農業・住民間諸活動への参加と意欲—

○ 栗畑 恭介（鳥取連大院）・伊藤勝久（島根大）

### はじめに

本報告では、中国西北部の出稼ぎ農村において、地域内の農業・住民活動の変化、それらへの参加意欲といった住民と農村とのつながりをみることで、今後の農村の担い手を考えてみたい。

中国西北部の農村では、2000年以降になって就業機会が増えたことにより農業から農外への労働力移動が本格化した。条件不利地域においては沿海などから近隣都市へと出稼ぎがより手軽なものとなり、2000年代半ばには一般的なものとなった。現段階では、出稼ぎ労働者の多くが一時的な離村に留まっているが、今後は労働者の質の向上と戸籍制度の更なる緩和に伴い恒久的離村が加速すると考えられる。そうした中、農業や住民間の諸活動への参加と意欲をみることは、地域居住の継続を判断するだけではなく、外部からの支援者、或いはUターンによる将来の担い手化といった離村者への期待を判断する材料にもなると考えている。

### 調査

寧夏回族自治区の南部山間部に位置し、出稼ぎ地域となっている固原市彭陽県において、条件の異なる3つの村で09, 10年の秋に村の指導者層に対しヒアリングを行い、地域住民を主要メンバーとする組織、活動の現状を把握した（昨年報告）。2011年9月に3農村からそれぞれ1集落を選定し、調査への同意を得られた住民に対して農業および地域活動への参加意欲等に関して、面接による質問紙調査を行った。

### 結果

昨年、明確に組織化・規定化された活動自体が少なく、公式な集会等も多くが意思決定を伴うようなものではないことを報告した。本報告ではオフィシャルなものだけではなく、地域住民間、或いは個人間で自発的に行われている活動も扱った。

調査時点の在村者からの聞き取りという性格上、若年者は農村での活動に関心が高い者が多くなる可能性はあるが、農業、地域活動ともに、出稼ぎを経験した30代の若い世代において比較的参加・意欲が高かった。逆に常に村に居るはずの高齢者を中心とした出稼ぎ未経験者の参加意欲は低く、村の活動状況も十分に把握していない場合がみられた。ただし地域条件により差がある。

また、村には20代以下はほとんど存在していない。現30代のように将来村に戻る可能性もあるが、昨年報告した、子供を媒介とした活動がみあたらず学校組織も地域から切り離されている状況を考えると、次世代からの担い手不足が懸念される。

**キーワード：**中国農村，住民活動，出稼ぎ，条件不利地域

（連絡先：栗畑 恭介 todokyoro@yahoo.co.jp）